

『今月の天候と農作業』

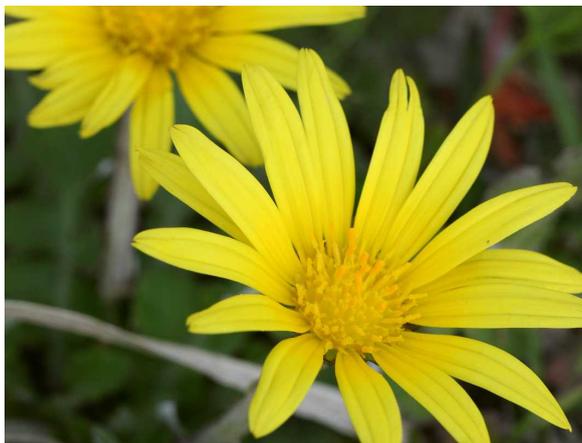
通巻第5578号

4月号

平成27年 4月 3日発行

宮 崎 県

宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

1週目の前半は気温が高く、1週目の後半から2週目にかけて気温がかなり低くなる可能性があり、気温の変動が大きい見込みです。

【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	60	30	10

【概要】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、少ない確率60%です。週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、低い確率50%です。

<1週目の予報> 4月4日(土)～4月10日(金)

気圧の谷や前線の影響で、曇りや雨の日が多いでしょう。

※詳しくは、週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 4月11日(土)～4月17日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、気圧の谷や前線の影響で、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 4月18日(土)～5月1日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 水管理

移植直後は、低温や強風の被害が発生しやすいため水管理は重要です。活着までの約一週間は、葉からの水分蒸散量を抑えるため深水とします。その後暖かい日は浅水で水温上昇に努め、低温時は深水で保温します。

2 病虫害対策

いもち病等防除のため苗施薬して移植しますが、購入苗では既に処理済みのものもあるので確認します。また、粒剤の除草剤を誤って苗箱に散布してしまった事例もあるので注意します。余り苗は葉いもちの発生源になるので補植後に処分します。ジャンボタニシ発生田では、浅水管理としたり、薬剤防除を行います。

3 除草剤の使用

ラベルの記載内容をよく確認して適切に使用しましょう。使用時期はノビエの葉期で処理晩限が標記されていますが、最も生育の早いヒエを基準とします。徒長苗や寒害に遭った軟弱苗は、処理期限内で苗の回復を待って散布します。ジャンボ剤やパック剤等では薬剤の拡散や、薬害防止のため定められた水深を保ちます。予め畦や水尻からの漏水を点検し、散布後一週間は水尻をしっかり止めましょう。

◆ 麦類

赤かび病防除のため小麦では穂揃期（開花期）に、二条大麦では穂揃期から7～10日後（蒴殻抽出期）に防除し、その7日目頃に2回目の防除を行います。

収穫までの登熟日数は、出穂後小麦で45日、二条大麦で40日くらいです。湿害を回避して収量の安定化のため、作溝するなど排水対策を徹底しましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ きゅうり

日中の気温が上昇し、日射しも強くなるため、蒸散量が多くなりますので、かん水量を増やします。また、葉に直射光線が当たると、葉の老化や葉焼け症等の発生につながりますので、日中は内張カーテン等を利用し日射量を調節します。特に、ハウス内が乾燥しやすく、湿度の低下は曲がり果や尻細果等の発生につながりますので、ハウス内が乾燥している場合には、通路散水等による湿度確保に努めます。

◆ ピーマン

最低夜温が上昇し、内張カーテンを閉めると暖房機が稼働しない日が続くようになります。このような日はハウス内の湿度が高まり病害が発生しやすくなりますので、ハウス外の最低気温が14度以上の場合には、内カーテンは開けたままにして、暖房機が稼働するように管理します。また、強光線による日焼け果等の発生防止のため、日中は内カーテンを利用し日射量を調節するとともに、換気に努め、ハウス内の温度を30度以下で管理します。

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等により白果の発生や赤果の発生が多くなります。また、成り疲れ等によるうどんこ病の発生が懸念されます。適期収穫に心掛けるとともに、着果のない中枝や老化枝、主枝上部の徒長枝など、光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行います。また、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下するのでこまめなかん水・追肥による草勢維持に努めます。

◆ トマト類

ミニトマトは気温上昇にともない裂果が多くなるので、かん水量に注意します。また、空中湿度を下げるため、日中の換気を徹底し、収穫遅れがないよう適期収穫に努めます。大玉トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるのでかん水量を増やします。また、草勢が低下すると小玉果となり、軟果玉や裂果が発生しますので追肥が遅れないように注意します。

◆ いちご

収穫も終盤となり、次年度用の育苗に作業の重点が移ってきます。特に炭疽病の発生等による苗不足は、収量の減少に直結します。炭疽病の発生を防

止するため、感染していない健全な親株を使用するとともに、感染の疑いのある苗は、その周囲の苗も含め早期に除去・処分するなど、万全の対策を実施します。

(黒木 正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ 栽培ほ場の土壌水分の確保

今月は上旬からマルチ栽培のかんしょ、さといもの植付け及び各種夏野菜のは種適期となります。土壌が乾燥した状態でマルチ被覆を行うと、発芽不良や生育障害、品質低下につながりますので適当な土壌水分（手で握って団子になる程度）の時にマルチ畝立てを行いましょう。

◆ スイートコーン

大型・小型トンネル栽培は、4月上・中旬の雄穂抽出期が追肥の時期となります。雄穂が出始めたら窒素成分で10畝当たり5～6kg追肥しましょう。追肥の時期が遅れると効果がありませんので適期に施用することが重要となります。雄穂抽出から10日から2週間後に雌穂（絹糸）が抽出し、その部分が果実となります。ボリュームがあり先端まで充実したスイートコーンを生産するためには、土壌水分が必要となりますので、通路への湛水等を行うとともに、トンネル内の高温による葉焼け等を防止するため、ビニルの除去及び開閉管理には細心の注意を払いましょう。また、株元からの分けつは、光合成による養分確保を行いますので、除去しないようにしましょう。

◆ さといも

早生種のマルチ栽培は萌芽の時期となります。萌芽を始めたならマルチに穴を開けて芽出しを行います。また、中生さといもは植付期となりますが、マルチ内が乾燥していると、芋肥大期の生理障害等を助長しますので、マルチ被覆前の適度な土壌水分が必要となります。

◆ 食用かんしょ

マルチ栽培の植え付け時期となります。苗床は外気にならし、かん水も徐々に減らし、苗の馴化を図ります。上旬は遅霜や平均気温が不足することか

ら挿苗後の活着が悪く、欠株も生じやすくなります。採苗は午後からとし、挿苗予定の3～5日前に苗を採苗し、取り置き苗を曇雨天で暖かい日に植え付けします。

◆ ばれいしょ

萌芽～生育期です。定期的にアブラムシ、疫病の予防を行います。

◆ オクラ

中旬以降が播種期になります。上旬は気温が低いため、立ち枯れ病が多発しやすくなります。早播きする場合はトンネル被覆など地温を上げる対策が必要です。

(河野健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ かんきつ全般

今年は着花量が少ないことが予想されます。着花数の少ない樹では、新芽との養分競合によって花芽の発育不良や生理落果が助長されます。発芽後に、花の着生の無い枝は、前年枝の基部から速やかに除去しましょう。

また最近では、発芽から開花までの期間が短く、花の充実不足に伴う生理落果が見られます。花の充実のため、開花期までに窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

◆ 完熟きんかん

剪定の終わっていない園は、急いで実施しましょう。たっぷりのかん水、春肥の施用、土壌改良資材や完熟堆肥等の有機物の投入によって樹勢回復を図りましょう。蒸し込みによって発芽揃いを良くし、新梢の充実を図るために、窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

◆ 日向夏

日向夏の結果安定には、人工受粉の実施が必須となります。適切な条件で花粉を採取し、精製してから受粉に利用しましょう。精製した花粉は発芽率

の調査をした上で、適正な倍率に希釈してから受粉に利用しましょう。

◆ マンゴー

収穫が近づくにつれて果皮が弱くなり、結露によってやに果が増加してきます。早朝の換気や敷きわら、ヒートポンプを利用した除湿によって結露を防止しましょう。

また、新芽の発生の増加にあわせてアザミウマ類の発生が多くなります。発生した新芽をすべて除去し、アザミウマ類の発生を防止しましょう。

2 落葉果樹

◆ かき

摘蕾は生理落果後の摘果に比べて、樹体養分の確保や翌年の花芽分化に有効です。開花始め頃から二分咲までの間に実施しましょう。1結果枝当たり1花を原則とし、長い結果枝には2～3花とします。

(山口 和典)

花き

◆ 電照ギク

ハウスの換気を徹底して茎葉のしまった水揚げの良い切り花にします。曇天が続くと湿度が高まり、白さび病が発生しやすくなりますので、定期的な予除を行います。

秋ギクは親株育成の時期です。育苗は作型と穂冷蔵の有無等の条件を考慮し、所要日数を計算して計画的に作業を進めてください。

◆ 夏秋ギク

8月出荷作型の挿し芽を中旬から順次行います。過剰な肥料の投入は生理障害の原因となりますので、事前に土壌分析を実施して投入量を決めます。5、6月出荷作型の「フローラル優香」は、低温により貫生花の発生が増加しますので、4月いっぱいまでは10度、消灯後3週間程度は16度を保つようにします。「精の一世」については、7月出荷作型は幼若性を獲得する恐れがあるので、消灯前は12度程度、消灯後は18度程度の夜温を確保しましょう。

◆ スイートピー

受粉から子実の肥大期になります。つる下げ、受粉時期のかん水を行います。施肥管理は草勢を見て行い、莢が大きくなり始めたら徐々に薄い液肥を施用してください。定期的な葉面散布も効果的です。

◆ ホオズキ

7月出荷予定の作型では中下旬にはマルハナバチを導入し着果の促進を図りましょう。また、最低温度が10度を下回ると、花粉の発芽が悪く着果が不良となりますので、温度確保に努めましょう。立ち枯れ性病害対策として土壌消毒を必ず実施しましょう。

◆ シキミ

春芽の萌芽時期になります。定期的な防除を実施し、黒シミ斑点病やサビダニ類の発生を抑えましょう。

◆ ラナンキュラス

出荷が終了したほ場で球根養成に入る場合は、ウイルス罹病株を抜き取り、廃棄します。養成株については、蕾を摘除し、球根の肥大を促し、その後徐々にかん水頻度を減らします。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜防疫対策

近隣諸国において口蹄疫の発生が続いています。また県内の16農場において、PED（豚流行性下痢）が発生しています。高病原性鳥インフルエンザに関しても野鳥の飛来が続いていることから家畜防疫体制には最大限の注意を払いましょう。

◆ 家畜

今月は、天気と気温がめまぐるしく変わるなど、日々の気候変動が大きいのが特徴です。気温の大きな変化は、幼畜にとってストレスになりますので、温湿度に十分気を配り、暖かい日中に換気するなど家畜の体調管理には十分に気を付けましょう。

◆ 飼料作物

今月はトウモロコシ・ソルガムの播種時期です。自給飼料の確保のため、計画的な作付けを行いましょ。近年、自給粗飼料の品質低下が問題になっています。土壌分析を行わずたい肥のみの施肥では、作物が必要とする栄養分が十分満たされず、特に粗タンパク質の低い飼料作物しかできません。そのような品質の悪い粗飼料を与えると栄養バランスが崩れ、牛の発情が弱くなる、あるいは発情がこないということがあります。お近くの農業改良普及センターにご相談いただき土壌分析を行い、しっかりとした施肥管理により良質な粗飼料生産に努めましょ。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 防霜対策

一番茶の生育に合わせた設定温度の確認と共に、防霜ファンの首振り角度や回転方向、スプリンクラーヘッドの詰まり等を再確認し、人為的ミスによる被害がないように注意ましょ。

2 施肥と防除

芽出し肥は、硫安等の速効性肥料を摘採の25日前までに散布ましょ。

カンザワハダニは気温の上昇とともに密度が増加ましょので、発生状況を確認し、地区の栽培暦に準じて葉裏にかかるように薬剤を散布ましょ。また、ツマグロアオカスミカメやコミカンアブラムシなどの発生にも注意ましょ。

3 一番茶の摘採及び製造

4月中旬頃からは一番茶の摘採が始まります。単価アップのためには良質茶の生産が不可欠です。茶工場の処理能力や一番茶の生育状況・降雨等を考慮し、摘み遅れにならないように摘採計画を立てて適期摘採を心がけましょ。

う。

また、事前に摘採機の刃研ぎや、製茶機の点検、清掃、試運転等を行い、トラブル回避に努めると共に、摘採時には、摘採袋等への生葉の詰め過ぎは避け、摘採後は速やかに茶工場へ持ち込み、欠陥のない荒茶製造に努めましょう。併せて、異物混入防止対策にも万全を期してください。

4 チャトゲコナジラミの発生に注意

県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。茶園でこの害虫が発生すると茶の葉にすす病が発生し茶の品質低下を招くことから、以下の項目に注意して茶園を観察し、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

- ① 成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。
- ② 茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③ 摘採袋や生葉コンテナの周囲を観察する。

(佐藤邦彦)

◆ しいたけ

1 選別

乾しいたけは、用途に応じて取引されるので、商品価値を高めて販売するためにも、規格表を参考に必ず選別を行います。特に、次の点に注意しましょう。

- ① 異物（虫、金属類等）は絶対入れない。
- ② 乾燥不良、虫害、カビ、黒子など規格外品は絶対に混ぜない。
- ③ 3号以下を他のサイズに混ぜない。
- ④ バレと縁に巻きがあるものとは別々にする。
- ⑤ できるだけ種菌、採取時期、日和子(ひよりこ)、雨子(あまこ)別に行う。
- ⑥ 丸形と変形とは区別する。
- ⑦ 雨の日など湿度の高い時には行わない。

2 箱詰め

箱詰めは、最初からたくさん入れずに、まず二分入れて揺すり込み、さらに四分、六分、八分と入れ、最後に十一分ほど入れて丹念に揺すり込みます。箱詰めがゆるいと、輸送途中で欠け葉を生じ、商品価値の低下を招く恐れがありますので注意が必要です。

3 採取

気象情報に注意しながら適期採取に努めましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、土寄せや収穫・乾燥に向けた準備が主な作業となります。

1 土寄せは、植付け後一ヶ月程度（最大葉が触れ合う状態になった頃）に実施しましょう。時期が早すぎると幹が傷つき、腰折病等の病害発生の原因となります。また、遅すぎると肥料吸収が遅れ、作柄が晩作化します。

不定根の発達を促進し本葉系を充実させるために、土寄せは確実に実施しましょう。特にローラー土寄せを行った際には、土が寄せられているか確認し、株元までしっかり土寄せを行いましょ。ほ地内に水が溜まると、生育不良や病害発生の原因となりますので、排水対策に努めましょ。

2 収穫・乾燥へ向けて作業場・貯蔵庫の清掃、使用物品の点検更新及び乾燥機の点検・空焚きを実施ましょ。3 異物混入防止のため、植付け穴のちぎれそうなマルチやほ地内におちているマルチ片を回収ましょ。

4 黄斑えそ病発生防止に向けて防虫ネット設置や共同防除に向けて話合いましょ。5 農薬を使用する際には「たばこ用農薬の使用基準」を遵守し、使用後は「農薬使用実績表」等に必ず記帳ましょ。

(松元 貴光)

内容の詳細について

4月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	置き苗は、いもち病の発生源や伝染源となるので早めに処分します。箱施薬をしていないほ場で、イネミズゾウムシの発生が目立ち始めたら粒剤の水面施用を行います。 スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺あるいは粒剤を水面施用します。また、用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入口にネットを設置します。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	— —	
野菜・工芸作物	アブラムシ類	並	各種のウイルス病を媒介するので、早期発見・防除に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病	並 並 やや少 並	いずれの病害も多発すると防除効果が上がりにくいので予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は伝染源となるので、適宜摘葉し、ほ場外に持ち出します。 キュウリ黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマは、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行います。
	黄化えそ病 (MYSV)	前年より少ない、前々年より多い	
	ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ類	並 並	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	並 並 並	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。また、罹病した茎葉は重要な伝染源となるので速やかに除去します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともに増殖しやすくなるので、発生初期に防除を行い、中～多発生のほ場では短い間隔で定期的に薬剤散布を行います。特にヒラズハナアザミウマの発生が多く、本虫は主に花に生息するため、着花の少ない時期に丁寧に防除すると効果が高まります。
	アザミウマ類 タバココナジラミ類	やや多 やや多	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並 やや少 並	今後、加温機の稼働時間が短くなり、果実等が結露しやすくなるので、循環扇を作動させる等施設内環境の改善に努めます。 タバココナジラミ類は、気温の上昇に伴い活動・増殖が活発になります。近年、トマト黄化葉巻病など本種によって媒介されるウイルス病が問題となっていますので、各人が防除を徹底し、地域全体の密度低下に努めます。
	タバココナジラミ類	並	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	やや多 やや少	株整理後の葉数が少なくなった時に、薬剤散布を行うと効果が高まります。いずれも薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 特にオンシツコナジラミについては、地域により薬剤感受性の低下が確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除する必要があります。
	ハダニ類 ※ オンシツコナジラミ	やや多 前年より多い、前々年より少ない	
カンキツ	そうか病 かいよう病	— —	いずれの病害も、罹病した枝葉は重要な伝染源となるので徹底的に除去します。 ミカンハダニの要防除水準は、寄生葉率30%あるいは葉当たり寄生虫数0.5～1頭です。
	ミカンハダニ	並	
茶	カンザワハダニ	やや多	一番茶萌芽期以降発生が多い場合には、農薬使用基準の摘採前日数等に注意して防除します。

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki>です。
- 4) 短期暴露評価の導入により、農薬の使用方法が変更になるものがありますので注意して下さい。